

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	松 原 愛
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>中国語を母語とする日本語学習者の日本語文の記憶における分散効果 —完全処理仮説の実験的検討—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教授 畑 佐 由 紀 子</p> <p>審査委員 教授 宮 谷 真 人</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、認知心理学における記憶現象の一つである分散効果について、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）を対象とし、その説明理論を実験的に検討したものである。具体的には、視覚呈示された日本語文を学習者が読んで覚える際に、分散効果が見られるのか否かを、日本語母語話者（以下、母語話者）との比較を通して調べ、分散効果が生起する諸条件を明らかにすることによって、完全処理仮説の妥当性を検討した。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第1章では、分散効果に関する先行研究を概観し、本研究の問題と目的を述べた。分散効果は、記憶材料の種類にかかわらず、多くの場面で観察される現象である。近年、母語だけでなく第二言語についても、語彙や文法項目の学習に関して分散効果を扱う研究がみられる。しかし、この現象が何故生じるかについては、符号化変動性仮説、処理不全説、完全処理仮説などが並存する。本研究では、諸説を吟味した上で、完全処理仮説を取り上げる。ただし、この説明理論にも問題点があり、特に作動記憶（<b>working memory</b>：以下、<b>WM</b>）との関連性が実験的に検討されていないことが挙げられる。本研究では、この点を中心に、完全処理仮説の妥当性を検証することを目的として、6つの実験を行った。</p> <p>第2章では、実験的検討について述べた。第1節では、<b>WM</b>容量の大小が分散効果の生じ方に及ぼす影響を検討するため、2つの実験を行った。実験1では母語話者を、実験2では学習者を対象として、<b>WM</b>容量の大小別に、集中条件と分散条件の記憶成績を比較した。その結果、母語話者と学習者の双方で分散効果が見られた。ただし、<b>WM</b>容量の大小は、分散効果の生じ方に影響を及ぼさないことが示された。第2節では、日本語文の音読時間を指標として、2つの実験を行った。実験3では上級学習者を、実験4では中級学習者を対象として、文の音読時間と記憶成績の関係を調べた。その結果、中級学習者と上級学習者の双方で分散効果が見られた。しかし、記憶成績が高い条件で音読時間が長くなる現象はみられず、文記憶における分散効果を音読時間の長短で説明することは困難であることが示された。第3節では、完全処理仮説が集中条件と分散条件における文処理の違いに着目した説明理論であることを踏まえ、呈示文の分散のさせ方に数種類を設けた2つの実験を行った。実験5では、中級学習者と上級学習者を対象とし、分散呈示事態の回数が</p>			

記憶成績に及ぼす影響を調べるため、集中条件、前半分散条件、後半分散条件、分散条件を設定して記憶成績を比較した。その結果、中級学習者では、集中条件よりも前半分散・後半分散条件、分散条件の記憶成績が高く、分散効果がみられた。文の記憶成績は、分散呈示事態の文処理の回数が多くなるにつれて高まるのではなく、それが1回でもなされれば高まることがわかった。上級学習者では、天井効果に近似した成績が得られ、分散効果はみられなかった。実験6では、中上級学習者を対象に、文の呈示間隔を操作し、0文介在条件（集中条件）、1文介在条件、3文介在条件、5文介在条件、8文介在条件の間で記憶成績を比較した。その結果、0文・1文介在条件よりも5文・8文介在条件の記憶成績が高く、3文介在条件は、他のいずれの条件と比較しても記憶成績に差がみられなかった。

第3章では、6つの実験について総合考察を行い、本研究の意義と発展課題を述べた。集中条件での文処理は、主にWMにある情報で完結するが、分散条件での文処理は、長期記憶の情報を活用して行われる。集中条件では、呈示文に関する情報がWMで処理される状態が一定時間継続するが、分散条件では、各文に関する情報がWMで断続的に減衰するので、文が呈示される度に長期記憶の情報が検索されて新たな処理が行われる。また、第二言語の文記憶における分散効果は、学習対象となる項目を反復呈示するとき、その間に何か1つでも他項目を介在させれば生じるのではなく、複数の項目を介在させることによって生じる現象である。本研究の結果は、符号化変動性仮説と処理不全説を支持せず、完全処理仮説をWM機能の観点から補完するものである。ただし、WM容量の大小が分散効果の生じ方に影響を及ぼさないことや、分散効果の生起に音読時間が関与しないことは、完全処理仮説でも説明が難しい。この点については、記憶材料の難易度を上げて再検証を行う必要がある。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 日本語教育の分野に、認知心理学で探究されてきた分散効果の視点を取り入れ、母語の学習だけでなく第二言語の学習においても分散効果がみられることを実証した。
2. 日本語学習における分散効果について、文の記憶に焦点を絞った体系的な実験を行い、分散効果が生じる諸条件を明らかにした。
3. 分散効果の説明理論の一つである完全処理仮説を取り上げ、呈示項目に関する情報がWMでどのように処理されるかを具体的に記述し、完全処理仮説を精緻化した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成27年2月16日